

〔「人助け指数」の話〕

CAF(イギリスチャリティ機関)の中に、寄付指数と人助け指数(ワールド・ギビング・インデックス)というものがあって、世界ランキングも出ているのだが、実は日本の順位はちょっと悲しくてここに書けない。災害の際などには、日本人のマナーや規律の良さ、相互の思いやりの美しさが世界中で賛美されるのに、なぜ、日本の「人助け指数」はこんなにも低いのだろう。

その昔、私がおもって若くて“力持ち”だったころだけけど、東京の駅の階段で重いトランクを一生懸命持ち運んでいる女性を、何度か手伝ったことがある。知り合いではない。たまたま同じ階段を上っていた一人に過ぎない。何故そんなことをしたかって？ ヨーロッパの生活の中で、いつも周りの人に同じように助けてもらったからだ。

ちょっと大袈裟に言うと、ヨーロッパでは、大きな荷物やトランクを持って出かけても、女性や高齢者はほとんど自分で持たずに済む。(日本のように便利な「宅急便」がないので、旅行の荷物は基本的にいつも自分が持つて出る。) タクシーに乗れば荷物は運転手さんが後ろのトランクに入れてくれるし、自動車では車掌さんが棚にあげてくれる。降りるときにも“誰か”がやってくれる。駅などの階段でも、“誰か”の手が伸びて、助けてくれる。普段の生活でも、大きな買い物の袋を持って、高いステップのある市電に乗ろうとすれば、どこからか手が伸びて、荷物を持ち上げてくれる。

特に学校などで教わったマナーではない。皆、社会の中で、周りの大人の姿を見て育ってきただけだ。高齢者に席を譲るのはもちろん「当たり前」だし。そうそう、パリの夕方のラッシュアワー時の地下鉄では、こんなシーンも見た。小学校2年生くらいの小さな男の子が、母親と一緒に乗ってきた。

「ママン、座りたいよ～！」

私はお母さんの返事にびっくりした。

「あのね、このおじさんたちは一日中働いて疲れてるの。あなたよりもずっとね。だから席が空いても、あなたではなくおじさんたちが座るのよ。あなたは若いし、我慢してしっかりと自分で立っていられるでしょう？」

忘れられない。そしてその後。

「ママン、でもあのコは坐っているじゃないか」と、彼は同い年くらいの小さな女の子をさした。母親は「でもあの小さい子は女の子よ。男のあなたの方がずっとしっかりとして強いでしょう?!」

ハハア、このようにしてフランスの男性は躓けられていくのだな、と秘かに感嘆した思い出である。

日本で最近耳にしたニュース。

ベビーカー(バギー)でバスに乗ろうとすると、運転手さんに「嫌な顔」をされるという。特に、双子用の大きなベビーカーは始末に悪い。簡単にたためないし、運転手さんにはあからさまに避けられるとか。

びっくりした。「不便なベビーカーの扱い」として取り上げられていたのだが、私が驚いたのはそれ以前の問題である。

「なんで、なんで、誰も助けてあげないの?!」

同じようなシーンはヨーロッパでもよく見かける。でも高いステップのある電車やバスに乗るベビーカーや車椅子も、まったく問題がない。なぜか。

運転手さんは「当たり前」に、自分が降りて乗客が乗るのを助けるし、その前に、“誰か”と一緒にベビーカーや車椅子を持ち上げる。降りる際にも、“誰か”が前もって自分で降りて、手を差し伸べて運んでくれる。だから、誰でも躊躇なく出かけられる。

もし誰も気づかないでいると、当人は臆せずに「すみません、どなたか助けてくださいますか？」と声をかける。そして、知らない人たちの間で、「ありがとう」「どういたしまして」が微笑みとともに交わされる。

40年以上、こんな場面を生活の中でずっと見てきた私は、この日本の「ベビーカーニュース」がとてもショックだった。日本では、こんな時に手を貸したらオセッカイ? いや、そんなことはないと思う。多分「習慣」の問題なのだ。そういうことに気づくか気づかないか。

日本でも最近をよく、駅員さんが車椅子の人の介助をする姿が見かけられる。社会の中で大人が“自然にきちんと”行動すれば、子どもはその背中を見て育っていく。「習慣」が身についていくはずだ。

習慣と言え、ば、「ドア押さえ」。

日本の最近の建物がほとんどが自動ドアのせいだろうか。手で開け閉めする扉の場合、次の人のために、ドアを手で押さえる習慣がない。だから、前の人バウンドで跳ね返ってきたドアが顔にぶつかりそうになることもある。私はドアを通った後、自動的に後ろを振り返ってしまう。誰かが来るのが見えると、ドアが閉まらないように押さえる。ほとんどの人は押さえられて

いるドアを、そのまま通っていく。時には何人も…。ほんの時折、「ありがとうございます」という言葉が聞かれると嬉しくなる。

もし前述のシーンが、知り合いの人と一緒にの時だったら？
荷物を持つのを助けるだろうし、車椅子の乗り降りにも手を貸すだろう。
後ろからくる友だちには、ドアを押さえるはずだ。

「知り合い」は助けるが、ヨソの人には知らん顔をする？

悪意のわけはない。本当に「習慣」の問題なのだろう。

友だちや知り合い、いわゆる「内輪」の人間関係と、知らないヨソの人への対応が、なぜこんなに違ってしまうのか。世界中で、「礼儀正しい日本人」が有名な一方、「礼儀知らず」という見方もされる。道や駅で人にぶつかっても謝らないとか、知らない人たちに対しては、あまりにも無頓着だとか。

私たちが外国で、あるいは知らない土地で困惑しているとき、笑顔で自然に交わされる気持ちの交流。それがどんなに嬉しいものか、自分で経験した人たちも多いはずだ。

その気持ちの持ち方を、「習慣」として、少しずつでもいいから社会生活の中に取り入れていきたい。そこに生まれる自然な「ありがとう」と「どういたしまして」。それだけで空気が温かく流れ、知らない人との世界が縮まる。

友人のブログで読んだ話を一つ。

とあるスーパーマーケットのレジで、支払いの際に、財布の中身がよく見えなくてマゴマゴしていたら、レジの“お姉さん”が優しく言ってくれたそうだ。

「私の手の上に、小銭を全部出してくださいな。そこから私が取りますから。」友人はとても暖かい気持ちになって、嬉しかった、と書いていた。(コロナ禍以前だが)東京での話だ。

ヨーロッパで買い物に出かける高齢者も、よく見えなかったり、手が震えたりで、スーパーのレジでまごまごとする人たちが多。そこで彼らはどうするか。なんとお財布をそのままレジの“お姉さん”に渡して、そこから取ってちょうだい、なんて言ったりする。

渡されたレジ係は、「はい、これが6ユーロ、あと35ペニツヒ取りますからね」などと言って、額を見せながら自分の手のひらにお金を置いて、お財布を返す。結構時間もかかるし、後ろの人は、確かにちょっとイライラ。でも最終的にちゃんと“機能”するのは、もしかしたら、いつかは自分もこうなるかも…との思いがあるのかもしれない。

時折、一人暮らしらしいお年寄りが、小売店の売り子さんに愚痴をこぼしたりして、話し込んでいるのにぶつかることもある。売り子さんは、本当は心の中でメンドクサイと思っているのかもしれないけれど、それでも表向きは実に親身に、忍耐強く話を聞いてあげている。

外国人(日本人)である私は、そのシーンのやさしさに、毎回のよう感動していた。行いそのものだけでなく、そこに生まれる(知らない人たち同士の)「会話」と気持ちの交流に心を打たれていた。

こういう様々な小さな光景が日常として存在する、それが「人助け指数」やいわゆる「民度」の高さに繋がっていくのかもしれない。ガンバロウ！